

# 異文化間コミュニケーション研究のデザイン\*

李吉鎔\*\*

ih\_kilyong@cau.ac.kr

## 〈 目 次 〉

1. はじめに	3.1 研究の目的と意義
2. 問題のありか	3.2 理論的検討
2.1 従来の異文化間コミュニケーション 研究の視点	3.3 調査の概要
2.2 従来の異文化間コミュニケーション 研究の内容	4. 成果報告および今後の課題
3. 研究プロジェクトのデザイン	4.1 研究論文
	4.2 研究発表
	4.3 今後の課題

Key Words : 異文化間コミュニケーション(cross-cultural communication)、  
母語場面(internal situations)、接触場面(contact situations)、  
言語管理理論(language maintenance theory)、  
相互評価意識(mutual evaluation)

## 1. はじめに

従来の多くの異文化間コミュニケーション研究は、研究の意義として、李吉鎔(2001)などのように、コミュニケーション上の誤解や摩擦の解消に役立てようという社会的な有用性をあげている(西原1994、尾崎編2008なども参照)。しかし、管見の限りにおいて、異文化間コミュニケーション研

\* This work was supported by the Korea Research Foundation Grant funded by the Korean Government (KRF-2008-321-A00114)

\*\* 中央大学校日語日文学科助教授、社会言語学

究が、コミュニケーション上の誤解や摩擦の解消に役立ったという報告は見当たらない。また、これまでの異文化間コミュニケーション研究の中には、アンケート調査や談話完成テスト(DTC: Discourse Complete Test)による資料をもって、言語行動の具体的な姿を描き出そうと試みるものもあった。しかし、アンケート調査はあくまでも意識調査であり、実態をどの程度把握しているかに疑問が残る。そして談話完成テスト資料(元智恩2010など)と面接調査資料あるいは自然談話資料とでは、「計画性」という変因が異なるのだが、それを検証した調査報告も、管見の限りにおいて見当たらない。

こうした先行研究の課題を踏まえ、中央大学校大学院社会言語学研究室では、2008年度より「韓・中・日の3ヶ国における異文化間コミュニケーションの普遍性と特殊性に関する研究プロジェクト」を立ち上げ、研究を遂行してきた。本稿では、上記の研究プロジェクトがどのような研究理念を持ち、どのようなプロセスで進めていく予定なのか、その研究のデザインをまとめる。これは、임영철·김윤희(2010)や김종완(2010)のように、今後、個々の言語行動に見られる問題を個別的に見ていくための、いわば序論的な、また鳥瞰的な見取り図に相当するものである。あわせて、これまでの韓日における異文化間コミュニケーション研究の問題のありかを指摘することをもくろむものでもある。本稿によって、韓国語と日本語を対象として対照言語行動研究を目指す若手研究者に、言語行動を捉える新たな視点を提供することが出来れば幸いである<sup>1)</sup>。

本稿の構成は、以下のとおりである。まず、第2節でこれまでの異文化間コミュニケーション研究の視点をまとめ、問題のありかを整理する。次に、第3節では、韓・中・日の3ヶ国における異文化間コミュニケーションの普遍性と特殊性に関する研究プロジェクトの概要を報告する。その後、インタビュー調査およびアンケート調査の実施状況を示す。最後に第4節では研究報告を行い、本研究プロジェクトがくみ上げることのできなかつた

---

1) 言語行動研究の概要や展望については真田他(1992)・真田編(2006)に、韓日の異文化間コミュニケーション研究の現状については生越(1997)・任榮哲(2009)に詳しいので参照されたい。

研究デザインの問題点や研究プロジェクトの社会的使命について述べる。

## 2. 問題のありか

### 2.1 従来の異文化間コミュニケーション研究の視点

まず、韓日両言語の対照研究に絞って、これまでどのような視点から言語行動研究が行われてきたかを整理しておこう。先達の研究にざっと目を通すと、次の2つの視点にまとめることができる(李吉鎔2006a:24)。

- (1) 言語行動の多様性の整理とその機能的説明を追求した研究
- (2) ダイナミックに変動する言語行動の具体的な姿を捉えた研究

(1)は、「誰が・いつ・どこで・何を・どのように・なぜ」言うか、あるいは言わないかに関する規則の整理である(萩野他1990・1991、尾崎2005など)。どのような表現(形式)をどのような場面(聞き手・場所・時間・メディア・話題など)で使い分けるのかという規則の整理と、なぜそのように使い分けるのかという説明に分けられ、いわば静的なアプローチの記述研究といえる。

(2)は、具体的な場面性と対人関係性を持ち、対話中のことばのストラテジーを動的に捉えようとする。会話のやりとりにおける話し手と聞き手のインターアクション、会話の展開に関する話し手の働きかけや話し手の働きかけを受けつつ働きかける聞き手の役割などが射程に入ってくる(金珍娥2002、李吉鎔2006aなど)。この視点からの研究は、社会言語学と、隣接する文化人類学やエスノメソドロジー研究とが互いに越境した、領域横断的な研究である。

従来、韓日両言語における言語行動の対照研究は、(1)の視点から発展してきたといえる。たとえば、李吉鎔(2001)や元智恩(2002)、金庚芬(2002)などは、反対意見表明行動や断り行動、敬語行動など、韓日の言語行動の構造や姿について多角的に考察を進めている。これらは、社会言語学の問題意識の一つとして挙げられる「ことばの多様性の認識と整理」を目

指したものである。

## 2.2 従来の異文化間コミュニケーション研究の内容

次に、これまでの韓日両言語の対照研究を中心に、異文化間コミュニケーション研究の内容を検討すると、次の2点にまとめることができる。

- (1) 依頼、断り、謝罪などの言語行動の対照研究が主流であるが、新しい言語行動の分析が試みられている
- (2) 上下・親疎・男女による言語行動の違いを見出そうとする

以下では、上の2点の内容に基づき、先行研究の問題点を詳しく検討する。

### 2.2.1 新たな言語行動の発掘の試み

近年の研究において、「慰め」、「皮肉」、「ジョーク」、「取り消し」など、これまでに触れられていない言語行動を取り上げることで、研究のオリジナリティを確保しようとする動きが見られる。これらは、基本的に、言語行動のあり方を描き出そうとするスタンスであるが、今後いくつもの言語行動を調べれば韓日の言語行動の違いがわかってくるというのかと問いたくなる。もしも、韓日の言語行動を左右する要因や言語行動における規則性の発見が目標なら(そして、それがまだ出来ていないという判断であれば)、依頼、断り、謝罪などの主流の言語行動を対象にし、先行研究との連携性を持たせるべきではないだろうか。

なお、新たな言語行動の導入により、「常識の数量的な確認」(洪珉杓 2007:6)のように、新しい視点が提供できればよいであろう。この種の研究は、必然的に仮説検証型となる。

### 2.2.2 要因探求型研究と実態記述型研究の視点の混在

また、これまでの研究では、上下・親疎・男女による違いを見出そうとするものが多い。上下・親疎・男女による違いを考察するということは、言語

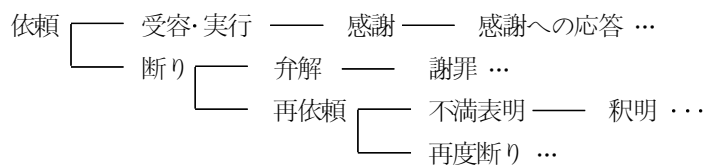
行動のあり方を左右する要因を探求するための仮説検証型研究のアイデアのはずである。しかし、こうした要因が言語行動の違いを説明するためだけに利用されている。

これまでポライトネス理論(Brown&Levinson1987)や変異理論(Labov1972)などのグランドセオリーを用いることで、韓日の言語行動の具体的な姿および言語行動のあり方を左右する要因について、多くのことが明らかになってきている(荻野他1990・1991)。今後は、たとえば、メッセージに託された表現主体の発話意図(encoding)とメッセージに対する受け手の解釈(decoding)の一致や不一致、メッセージに対する相互評価に関する研究、または李吉鎔(2009)のように、話し手の心的距離の変化による依頼行動表現の違いの探究などといった新しい視点が求められよう。

### 2.2.3 パラドックスな面を持つ言語行動研究

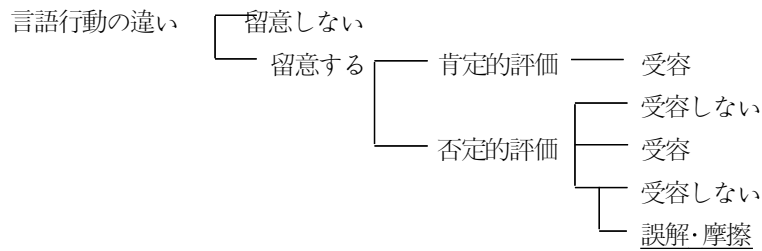
これまで述べてきた多くの研究は、依頼、断り、謝罪などの言語行動の構造や具体的な言語表現を独立したものと取り上げている。「ことばの多様性の認識と整理」という問題意識から、言語行動の多様性を探求しようとする研究のほずなのに、言語行動の多様性を否定するというパラドックスが見受けられる。こうしたことも、要因探求型あるいは仮説検証型研究と、実態記述型研究のアイデアが混在するためであると思われる。

そこで、一連の言語行動が有機的に結びついているという点に注目した、相互作用としての言語行動研究が求められよう。たとえば、依頼行動について言えば、次のような発話行為の連鎖が考えられる。こうした発話行為の連鎖を分析することで言語行動の多様性を理解することができるのではないだろうか(尾崎2005)。



### 2.2.4 誤解を生む誤解に役立つ研究

李吉鎔(2001)などの多くの研究が、研究の意義として、コミュニケーション上の誤解や摩擦の解消に役立つという社会的な有用性をあげている。社会言語学のもうひとつの柱である「社会問題に対することばの面での対処」をもくろむものであろう。言語行動の違いによって誤解や摩擦が引き起こされる可能性は否定できないが、言語行動の違いそのものが誤解や摩擦を引き起こす要因ではない。たとえば、コミュニケーション上の誤解や摩擦の生成プロセスは、ごく簡略にまとめても、次のようなものが考えられる。



少なくとも、言語行動の違いが相互の話者にどのように評価されるかによって誤解の生まれる度合いは異なり得る。たとえば、西洋人の陽気なジョークのように、日本において一般にプラス評価を受ける言語行動は誤解や摩擦につながりにくく、相手の私的領域に踏み込む言語行動のように、一般にマイナス評価を受けるものは、誤解や摩擦のリスクが高くなるであろう。ここに「評価に関する研究」が要求されるのである。韓国人の日本人の言語行動に対する評価や日本人の韓国人の言語行動に対する評価はどうであろうか、また、日常会話や会議などの目的志向的談話とは異なるのではないだろうか。こうした視点からの研究が期待される<sup>2)</sup>。

2) 関連して、任・生越(2005:3)や任榮哲(2009:399)は、研究事例から得られた成果の位置づけにおいて、民族的な特徴や日本人論・韓国人論と結び付けようという過剰一般化も多々見受けられると指摘している。研究の限界をわきまえるべきであろう。

### 2.2.5 アンケート資料による実態研究

最後に、研究方法の問題点として、アンケート調査・DTC・調査票による面接調査などによる資料から、言語行動の具体的な姿を描き出そうとするということがあげられる。たとえば、次のような質問の設定である。

まず、(1)アンケート調査において、「親しくない先輩に、3万円を借りたいとき」、「親しい友達に、ペンを借りたいとき」などといった、言語行動が観察されそうな社会的に意味のある典型的かつ具体的ないくつかの場面を設定する。続いて、(2)上記の場面ごとに、どのような表現を使うか、その内省を問う(李吉鎔2001・2009など)。あるいは、(3)言語変項を設定し、上記の場面ごとにどのような形式を使用するか、その内省を問う(荻野他1990・1991など)。

こうした調査場面の設定は、話し手のもつバリエーションが聞き手との社会的距離によって使い分けられるという仮定によるものであり、基本的な発想は、コードの選択は場面ごとに行われるといったドメイン型である(任榮哲2008:108)。しかし、コードの切り替えは、ひとつの場面のなかでも秩序あるものとして行われる可能性があり、スピーチレベルシフトの研究などでは、一つの談話の中で、話し手の意図的な操作による表現形式の使い分けも指摘されている(李吉鎔2006aなど)。

関連するものとして、(2)では、同一場面内でコードの切り替えが行われるとき、このような方法では具体的にどの言語項目が切り替えの対象となるかも不明である。一方(3)の方法は、研究の対象となる言語表現を設定しはするが、その取り上げ方は恣意的であり、網羅的ではない。したがって、想定されていない言語表現は、自由記入という欄を設けてはいるが、ほぼ選択不可能に近い。

なお、アンケート調査はあくまでも意識調査である。実態をどの程度把握しているかに疑問が残る。また談話完成テスト資料(元智恩2010など)と面接調査資料あるいは自然談話資料とでは、「計画性」という変因が異なる。さらに、任・生越(2005:4)も指摘するように、設定された調査場面の非現実性を含めて((1)の調査場面など)、国によって調査の意味が異なる場合もある。そうすると、調査結果に意図したこととは別の要素が含ま

れてしまう。

以上、本節では、従来の異文化間コミュニケーション研究の問題のありかを整理してきた。その結果は、次の2点に要約できよう。

- (a)研究の問題意識が不明瞭である
- (b)方法論的な不適切性が指摘される

次節では、韓・中・日の3ヶ国における異文化間コミュニケーションの普遍性と特殊性に関する研究プロジェクトのデザインを報告する。

### 3. 研究プロジェクトのデザイン

#### 3.1 研究の目的と意義

本研究プロジェクトの目的および意義は、次のようにまとめられる。

- (1)韓・中・日の3ヶ国の異文化間コミュニケーションのあり方に関する統合的な研究
  - (1-1)母語場面と接触場面における言語行動の実態を調査
  - (1-2)言語行動に関する使用意識と相互の評価意識を調査
  - (1-3)会話の開始から終了までの一連の言語行動を調査
- (2)個人情報という抽象的な内容を研究の材料として導入

まず、本研究プロジェクトでは、韓・中・日の3ヶ国の言語行動について、母語場面と接触場面を設定し、その実態を比較対照できるようにした(1-1)。母語場面の調査は、韓・中・日3ヶ国の人々の言語行動の対照研究のための資料収集を目的としたものであり、接触場面における異文化間コミュニケーション研究のベースラインデータとしての役割を果たす。次に、言語行動に関する使用意識および3ヶ国の相互評価意識を問うている(1-2)。3ヶ国の言語行動のステレオタイプに対する互いの評価意識を調べることで、



コミュニケーション上の誤解や摩擦に関する研究に一步近づくことができよう。この点は本研究プロジェクトの大きな特色のひとつである。

さらに、本研究プロジェクトでは、目的志向的な言語行動の開始から終了までの一連の行動を総体的に把握する(1-3)。ここでは、(導入部)あいさつ-自己紹介-(主要部)依頼-誉め-誉めに対する返答-勧誘-断り-謝罪-不満表明-釈明-(終結部)感謝-あいさつ、などという一連の行動の連鎖を分析する。

(2)については、主要部の依頼行動の具体的な内容として、近年ますますその重要度が高まってきた「個人情報」という抽象的な内容を取り入れた。これまでの研究は、ペンまたは3万円を借りるなどといった物の貸し借りを対象としてきたが、本研究プロジェクトでは個人情報という抽象体が社会的に意味を持つと判断し、時代の要請に応えるべく研究の材料を広げたのである。なお、個人情報の開示要求は、負担度の違いにより7段階に設定しているが(§3.3.1(c)参照)、それぞれの負担度によって、言語行動の違いが予想されたためである。

なお、本研究プロジェクトでは韓・中・日の3ヶ国の言語行動の対照を行うが、韓国語や日本語によるコミュニケーションの対照研究は比較的が多い。しかし、韓国・日本に知られている中国語によるコミュニケーション研究は多くないように思われる。韓国および日本における在留外国人の大多数が中国語を母語とする人であることを考えれば、中国語による言語行動研究は急を要するものであろう。本研究プロジェクトが韓・中・日の3ヶ国の言語行動の対照研究のひとつのベースラインになることを期待する。

### 3.2 理論的検討

本研究プロジェクトでは、最初のステップとして、対照言語行動や異文化間コミュニケーションを分析した先行研究を検討し、主要な背景理論として、Brown & Levinson(1987)のポライトネス理論(politeness theory)、ネウストプニー(1995)の言語管理理論(language maintenance theory)を採用した。そして、Labov(1972)の変異理論(variation theory)、Canale & Swain(1980)の伝達能力(communicative competence)、井出(1992)の社会的に固定化された制度的

ことばづかひの「わきまえ」などを検討し、その考え方を参考に研究をデザインした。

本研究プロジェクトで背景理論として採用した言語管理理論は、ネウストプニー(1995)などによって提案されたもので、渋谷(1999)によれば、ある言語、特にそれを用いた談話のなかに問題があると留意されたとき、その言語に関わる主体は、その問題を排除または軽減しようとして、言語のあり方を操作することがあり、この操作を、言語管理と呼ぶという。言語問題は、期待(規範)からの逸脱をきっかけとする、管理プロセスの形をとる<sup>3)</sup>。

本研究プロジェクトでは、母語話者と学習者との間の異文化間コミュニケーションの中で、自身のことばの問題に気づいたり、話し相手からの影響を受けつつ自身のことばを調整していくという言語管理、あるいは言語計画の具体的な姿を、ネウストプニー(1995)の言語管理理論の中で捉え直す。

### 3.3 調査の概要

資料の収集は、次の2種類の調査によって行われた。

- (1)言語行動の実態把握のためのインタビュー調査
- (2)言語行動のモデル設定のためのアンケート調査

#### 3.3.1 インタビュー調査のデザイン

インタビュー調査は、次のような3つの基本的な要素に構成されている。

- (a)依頼を中心とする言語行動：大学生が指導教授に同意書および推薦書を依頼する(§2.2.1の問題に対処)
- (b)導入部から終結部までの一連の言語行動：会話の開始(指導教授の研究室を訪

---

3) 言語管理プロセスの基本的な構造を渋谷(1999:12)にしたがってまとめれば、次のようになる。

- (1)逸脱がある
- (2)それが留意される
- (3)留意された逸脱が評価される
- (4)評価された逸脱(問題)の調整のための手続きが選ばれる
- (5)その手続きが実施される

間)から終了まで(指導教授の研究室を出る)の全過程を把握する(\$2.2.3の問題に  
対処)

- (c)個人情報開示の要求：「住所、年齢、婚姻関係、収入(年収)、住居形態、職  
階、最終学歴」などの個人情報を7段階に設定した(\$3.1)

さらに、本研究プロジェクトでは、「依頼行動」を中心に、「褒め行動」、  
「不満表明」、「不満表明に対する釈明行動」、「断り行動」といった言語行動  
研究の代表的な4つの要素を加味し、インタビュー調査をデザインした。

インタビュー調査場面の設定および調査の流れは、以下のようである。

<インタビュー調査場面の設定>

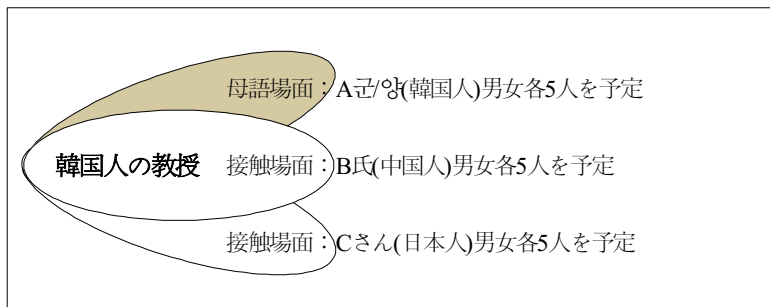
- (1)学生の状況：学生は、A航空会社が実施するアメリカの大学の訪問プログラム  
があることを知り、そのプログラムに参加することにする。
- (2)必要な書類：プログラムの必要な書類として、申込書(学生が作成)、保証人と  
しての指導教授の同意書が要る。同意書には指導教授の個人情報(年齢、収入  
など)を記入する項目があり、あなたの保証人になることを承諾するという署  
名が必要である。この二つの書類は必ず提出しなければならない。これ以外  
に指導教授の推薦状があれば審査に反映されるという規定がある。
- (3)学生との関係：指導教授は30~40代の先生で、何回か話を交わしたことがある。

<インタビュー調査の流れ>

- (a)研究室に伺う：同意書への記入と署名をもらうために、本日指導教授の研究室  
を訪ねることを伝えておいたが、具体的な内容についてはまだ話していない。
- (b)学生の依頼：学生はノックをし、指導教授の研究室に入る。簡単な挨拶と自己  
紹介をし、伺った用件を話す。その後、指導教授に同意書の作成および署名  
を依頼する。
- (c)学生の釈明：指導教授は同意書の作成を承諾してくれる。続いて学生は、推薦  
状(自由様式)も依頼する。指導教授は推薦状の作成には時間がかかるのに、縮  
め切りが迫った状況で依頼されることに、不満を表明する。学生はこれにつ  
いて釈明する。
- (d)学生の断り：指導教授は推薦状を書いてくれることを承諾し、次の日の午後、  
取りに来るよう言われる。そのとき、留学生歓迎会の案内係りを頼まれる  
が、学生はそれを断らなければならない状況におかれていて、断りの意を示  
す。指導教授の研究室を出る。

こうしたインタビュー調査は、仮説設定(問題点の抽出)を目的とした実態記述型研究を目指したものである。韓国語と中国語、また日本語による(接触)言語行動の調査となる。たとえば、韓国調査の場合、韓国人の教授と韓国人、韓国人の教授と韓国国内の中国人留学生および日本人留学生との、韓国語による会話場面を設定した。すなわち、韓国人の母語場面と中国人留学生、日本人留学生の接触場面である。図に示すと、次の通りであるが、日本語および中国語による(接触)言語行動の場面設定も同様である。

図1 インタビュー調査の場面



韓国語による談話収録は、韓国人の男女各5人の計10人を予定し、中国人留学生、日本人留学生も同数を予定した。これら30人に対して、一人の調査者(女性の教員)が一人当たり20分のインタビューを行う(計600分・10時間分)<sup>4)</sup>。韓・中・日の3ヶ国における談話収録量は、1800分・30時間分であり、これらすべてを文字化し、コーディングをしている。

### 3.3.2 インタビュー調査の実施

インタビュー調査は次のような順序で行われた。まず、調査協力者の学生に準備室[1]に集合してもらい、調査の手順の説明を行った後、フェース

4) インタビュー調査に使用した録画・録音媒体は、次のとおりである。録画用ビデオカメラ(Victor AVCHD Everio GS-HD30-S)1台および録音用レコーダー3台(SONY IC Recorder ICD-UX80)である。

シートを作成してもらった。次に、インタビュー室に案内し、インタビューが終わった段階で、準備室[2]でフォローアップインタビューを行った。調査協力者にフォローアップインタビューを行なっている間に、インタビュアー役を務めてもらった各言語の母語話者に、調査協力者の言語行動に対する評価表を作成してもらった<sup>5)</sup>。

インタビュー調査の日程およびインタビュアーの情報は次の通りである。

- (a)韓国語によるインタビュー調査：2009年5月11日～6月11日、中央大学校(インタビュアー：朴良順、中央大学校文科大学日語日文学科非常勤講師)  
 韓国語母語話者10名：男性5名・女性5名  
 中国語を母語とする韓国語学習者11名<sup>6)</sup>：男性5名・女性6名  
 日本語を母語とする韓国語学習者10名：男性4名 女性6名
- (b)中国語によるインタビュー調査：2009年4月19日～23日、北京外国語大学(インタビュアー：朱桂榮、北京日本学研究センター常勤講師)  
 中国語母語話者11名：男性3名・女性8名  
 日本語を母語とする中国語学習者10名：男性5名 女性5名  
 韓国語を母語とする中国語学習者10名：男性2名 女性8名
- (c)日本語によるインタビュー調査：2009年10月18日～22日、東京大学(インタビュアー：生越まり子、青山学院大学教授)  
 日本語母語話者10名：男性6名・女性4名  
 中国語を母語とする日本語学習者11名：男性3名 女性8名  
 韓国語を母語とする日本語学習者10名：男性5名 女性5名

### 3.3.3 アンケート調査のデザイン

アンケート調査は、インタビュー調査によって設定された仮説のモデル化を目指したものである。韓・中・日の3ヶ国の人々の言語意識および各々

- 
- 5) なお、対話参加者は、当該の場面で相手の言語行動について意識的であれ、無意識的であれ、ある評価を下す。本研究プロジェクトでは、インタビュアー役を務めてもらった各言語の母語話者に、相手の言語行動に対する評価表を作成してもらった。この結果は、母語話者にとって好ましい言語行動の具体的な様相として報告される予定である。
- 6) 各国での調査において、中国語を母語とする人の数が1名多いことになっているが、特に意図したことではない。

の言語行動に関する相互評価を問うたものである。

まず、アンケート調査票は、次の4つの部に構成されている。

- (A)韓・中・日の3ヶ国の文化に対するイメージ(6項目)
- (B)学生の指導教授に対する同意書および推薦書の依頼を中心とした言語行動(16項目)
- (C)実際の場面であれば遂行したかどうかという、調査に対する評価(5項目)
- (D)韓・中・日の3ヶ国の人々の典型的な言語行動(同意書および推薦書の依頼、不満表明に対する釈明、断り)に対する相互評価(3項目)

(A)の項目は、自国の文化および他国の文化に対する好感度(選択式)やキーワード連想語(記入式)を問うたものである。互いの文化に対する好感度により言語行動の違いが見出せるか、という仮説の検証を試みたものであるが、なかでも特に項目(D)との相関関係の解明を意図した設問である。

(B)の項目は、「あいさつ－自己紹介－依頼－誉め－誉めに対する返答－勧誘－断り－謝罪－不満表明－釈明－感謝－あいさつ、という一連の言語行動の連鎖」を問うた設問である。それぞれ「選択式・DTC・言語行動の順序並べ」に構成され、異文化間コミュニケーションの具体的な相互作用の様相を、発話内容や構造の面から明らかにすることを目的としたものである。

(C)は、調査場面の実現可能性を問うた設問である。設定された調査場面の非現実性の問題や国による調査の意味合いが異なるといった問題 (§2.2.5の問題)に対処するために設定した。

(D)は、目的志向的な談話((B)の項目)のなかで、中核をなす言語行動(同意書および推薦書の依頼、不満表明に対する釈明、断り)における韓・中・日のステレオタイプに対して、互いの評価意識を調べた設問である<sup>7)</sup>。各言語行動に対して、「丁寧」、「具体的」、「論理的」、「対人配慮的」、「目的指向的」

7) 韓国の調査では、韓・中・日の順に言語行動のステレオタイプを配置し、中国の調査では中・日・韓の順、日本の調査では日・中・韓の順に言語行動のステレオタイプを配置し、評価してもらった。韓・中・日の言語行動は、それぞれのことばに訳したものをを用いた。なお、インタビュー調査やアンケート調査の結果によりステレオタイプを抽出したため、追加調査の形をとった。

の5つの評価項目について、それぞれ「全く違う、少し違う、少しそうだ、とてもそうだ」の4段階の評価をしてもらった。たとえば、韓国人の典型的な依頼行動に対して、「目的志向的」、「対人配慮的」という評価が高く、中国人の典型的な依頼行動に対しては、「具体的」、「論理的」という評価が、また日本人の典型的な依頼行動に対しては、「丁寧」、「対人配慮的」という評価が高い、などというインタビュー調査の結果が反映されることが期待される。

次に、アンケート調査票の質問形式は、次の通りである。

- (i)基本的な選択式：先行研究および予備インタビュー調査から得られた言語表現をランダムに配置
- (ii)記入式(A)の3項目
- (iii)DTC(B)の3項目：同意書の依頼、不満表明に対する釈明、断り)：アンケート調査とDTC、インタビュー調査の比較のために設定(§2.2.5の問題に対処)
- (iv)言語行動の順序並べ(B)の6項目

(i)選択式および(iii)のDTCは、インタビュー調査資料との比較をも目論んだものである。本研究プロジェクトで、アンケート調査資料とDTC資料、インタビュー調査資料の異同を検証しようとしたものである。

アンケート資料の量は、各国で400サンプルを目指している。統計的に有意な差が見出される時点で終了する予定なので、若干の増減はある。こうしたインタビュー調査とアンケート調査の併用により、次の3点の問題点が克服できると期待される。

- (1)インタビュー調査のデータ量の少なさを補い、調査結果の一般化を目指す
- (2)意識の反映というアンケート調査資料を補償する
- (3)実態と意識の両面の相補的解釈を可能にする

### 3.3.4 アンケート調査の実施

アンケート調査の日程およびサンプル数は、次の通りである。

- (1)言語行動意識調査：計1210サンプル
- (d)韓國人を対象にしたアンケート調査：  
・2009年5月～6月、中央大学校、416サンプル
- (e)中国人を対象にしたアンケート調査：  
・2009年4月～5月17日、北京外国語大学、380サンプル
- (f)日本人を対象にしたアンケート調査：414サンプル  
・2009年7月～2009年8月、明海大学・実践女子大学・清泉女子大学・首都大学東京、115サンプル  
・2009年10月～12月、首都大学東京・東京大学、横浜国立大学、178サンプル  
・2010年4月～5月、早稲田大学、121サンプル
- (2)相互評価調査：計936サンプル
- (g)韓国調査：2009年11月～12月、中央大学校、314サンプル
- (h)中国調査：2009年11月～12月、北京外国語大学、323サンプル
- (i)日本調査：2009年10月～12月、東京大学、2010年4月～5月早稲田大学、299サンプル

#### 4. 成果報告および今後の課題

まず、現在までの本研究プロジェクトの成果報告は、次の通りである。

##### 4.1 研究論文

- (1)김종완(2010) 「한중일 의뢰행동의 발화패턴 분석 - 한중일 대학생 설문 지조사를 중심으로-」 『일어일문학연구』 제73집 한국일어일문학회 pp.111-139
- (2)임영철(2010a) 「한중일 3국의 문화적 이미지에 대한 연구 - 대학생을 중심으로」 『일본연구』46호 한국외국대학교 일본연구소
- (3)임영철(2010b) 「이미지연상어의 유형과 평가에 대한 연구 - 한중일 3국의 대학생을 중심으로-」 『동북아문화연구』24집 동북아시아문화학회
- (4)임영철·김윤희(2010) 「한일 거절표현의 구조에 대한 사회언어학적 접근」 『일본연구』 제43호 한국외국어대학교 일본연구소 pp.525-540



- (5) 임영철·황혜선(2010) 「한·중·일 3국의 의뢰과정에서의 해명에 대한 대  
조사회언어학적인 연구」 『일본근대학연구』 제30집(상) 한국근대일본학  
회 pp.63-81

#### 4.2 研究発表

- (1) 김종완(2009) 「한중일 의뢰행동의 발화패턴 분석 - 한중일 대학생 설문  
지조사를 중심으로 -」 한국일어일문학회 국제학술대회 (2009년 12월)
- (2) 김종완(2010a) 「한중일 의뢰행동의 발화패턴 분석 - 한중일 대학생 인터  
뷰조사를 중심으로 -」 한국일본학회 국제학술대회 (2010년 9월)
- (3) 김종완(2010b) 「일본어에 의한 의뢰행동의 담화구조의 분석 - 일본어  
인터뷰조사의 무브사용 분석을 중심으로 -」 동아시아일본학회 국제학  
술대회 (2010년 10월)
- (4) 박양순(2010) 「한중일간 커뮤니케이션에 있어서의 상호작용의 실태」  
BK21 NEO-JAPANESE 국제학술심포지엄 (2010년 11월 19일, 중앙대  
학교)
- (5) 李吉鎔(2010) 「異文化間コミュニケーション研究をデザインする」BK21  
NEO-JAPANESE 국제학술심포지엄 (2010년 11월 19일, 중앙대학교)
- (6) 임영철(2010) 「이미지 연상어의 유형에 대한 연구 - 한중일 3국의 대학  
생을 중심으로 -」BK21 NEO-JAPANESE 국제학술심포지엄 (2010  
년 11월 19일, 중앙대학교)

#### 4.3 今後の課題

まず、尾崎編(2008:109)では、日本語の調査票を韓国語に訳す場合、訳  
された韓国語を再度日本語に訳すことで、両言語間で表現の等価性を確認  
しているが、本研究プロジェクトではそのような確認作業は実行されな  
かった。それによって、「持ち家」を「自宅」に訳すなどの不備があったこと  
も事実である。より厳密な研究方法が要求される。

次に、社会言語学分野の言語調査がもつ社会的使命についてであるが、  
これまで多くの調査研究において情報提供をする人々と情報提供を受ける

研究者という非対称性の問題が指摘されてきた。李吉鎔(2006b)は、言語調査における研究者と調査に協力してくれる人々との関係のあり方について、臨床性・横断性という視点から検討を行い、研究者と調査協力者との不平等な関係を改善し、互恵的パートナーシップの確立が望まれること、研究者と調査協力者とが共に問題を発見し、共に行動計画を策定する「参加型アクションリサーチ」が求められることなどを指摘した。これらは、調査協力者を、単なる情報提供者としてだけでなく、研究の主体として位置づけ、研究者と調査協力者とが協力し、継続的な研究を行うことによって新たな付加価値の創出を願ったものである。本研究プロジェクトでは、残念ながら、こうした参加型アクションリサーチを実現することはできなかった。いずれも今後の課題としたい。

#### <参考文献>

- 阿部貴人(2002) 音声・音韻レベルの切り替えについて、『待兼山論叢日本学編』第36号 大阪大学文学会 pp.45-61
- 李吉鎔(2001) 日・韓両言語における反対意見表明行動の対照研究－談話構造とスキーマを中心として－ 『阪大日本語研究』13 大阪大学文学研究科 pp.19-32
- \_\_\_\_\_(2006a) 韓国人と日本人のスタイル切換え」真田信治監修・任栄哲編『韓国人による日本社会言語学研究』ひつじ書房 pp.22-47
- \_\_\_\_\_(2006b) 言語調査を内観する－調査者の思いとフィールドの声－ 『2005年度〈若手研究集合〉報告書』大阪大学21世紀COEプログラム インターフェイスの人文科学』大阪大学文学研究科・人間科学研究科・言語文化研究科 pp.79-100
- \_\_\_\_\_(2009) 韓国人と日本人の言語行動を左右する背景要因－心的距離の変化とスタイル切換えの様相－ 『日本研究』第26輯 中央大学校日本研究所 pp.83-103
- 井出祥子(1992) 日本人のウチ・ソト認知とわきまへの言語使用』『月刊言語』21-12 大修館書店 pp.42-53
- 任栄哲(2008) 身体接触から見た個人テリトリー意識の日韓比較』尾崎喜光編『対人行動の日韓対照研究：言語行動の根底にあるもの』ひつじ書房 pp.91-110
- \_\_\_\_\_(2009) 日本における韓国語研究の社会言語学的接近』『日本学研究』第26輯 檀国大学校日本研究所 pp.387-408
- 任栄哲・生越直樹(2005) 日本語と韓国語 朝鮮語をめぐって』『社会言語科学』8-1 社

- 会言語科学会 pp.1-4
- 元智恩(2002) 日本語と韓国語の断り表現の構造－指導教官の依頼を断る場面を中心に－ 『言語学論叢』21 筑波大学一般・応用言語学研究室 pp.21-37
- \_\_\_\_\_(2010) 語用論的観点からの日韓の慰めのストラテジー 『日本文化研究』第36輯 東アジア日本学会 pp.365-378
- 萩野綱男・金東俊・梅田博之・羅聖淑・盧顕松(1990) 『日本語と韓国語の聞き手に対する敬語用法の比較対照』 『朝鮮学報』136輯 朝鮮学会 pp.1-51
- \_\_\_\_\_(1991) 日本語と韓国語の第三者に対する敬語用法の比較対照 『朝鮮学報』141輯 朝鮮学会 pp.1-42
- 生越直樹(1997) 朝鮮語の社会言語学的研究 国立国語研究所編『日本語と外国語との対照研究IV 日本語と朝鮮語(上)回顧と展望編』くろしお出版 pp.51-64
- 尾崎喜光(2005) 依頼行動と感謝行動の<関係>に関する日韓対照 『社会言語科学』8-1 社会言語科学会 pp.106-119
- 尾崎喜光編(2008) 『対人行動の日韓対照研究：言語行動の根底にあるもの』ひつじ書房
- 金庚芬(2002) 『ほめに対する返答』の日韓対照研究 『言語・地域文化研究』第8号 東京外国語大学大学院地域文化研究科 pp.179-196
- 真田信治・渋谷勝己・陣内正敬・杉戸清樹(1992) 『社会言語学』おうふう
- 真田信治編(2006) 『社会言語学の展望』くろしお出版
- 渋谷勝己(1999) 国語審議会における国語の管理 『社会言語科学』2-1 社会言語科学会 pp.5-14
- 野間秀樹(2005) 韓国と日本の韓国語研究－現代韓国語の文法研究を中心に－ 『日本語学』24-7 明治書院 pp.16-31
- 西原鈴子(1994) 『在日外国人と日本人との言語行動的接触における相互誤解』のメカニズム－日本語と英・タイ・朝・仏語の総合的対照研究－ 『平成5年度科学研究費補助金研究成果報告集』
- ネウストブニー, J. V.(1995) 日本語教育と言語管理 『阪大日本語研究』7 大阪大学文学部 日本語学部講座 pp.67-82
- 洪珉杓(2007) 『日韓の言語文化の理解』風間書房
- Brown, P. and Levinson, S.(1987) *Politeness: Some universals in language use*. Cambridge: CUP
- Canale, M. and Swain, M.(1980) "Theoretical Bases of Communicative Approaches to Second Language Teaching and Testing" *Applied Linguistics* 1. pp.1-47.
- Labov, W. (1972) *Sociolinguistic Patterns*. Philadelphia, P. A.: University of Pennsylvania Press.

접 수 일: 12월 31일  
 심사완료: 1월 26일  
 게재결정: 1월 28일

## &lt;要旨&gt;

## 異文化間コミュニケーション研究のデザイン

本稿は、中央大学校大学院社会言語学研究室の「韓・中・日の3ヶ国における異文化間コミュニケーションの普遍性と特殊性に関する研究プロジェクト」が、どのような研究理念を持ち、どのようなプロセスで遂行していく予定なのか、その研究のデザインをまとめたものである。個々の言語行動に見られる問題を個別的に見ていくための、いわば鳥瞰的な見取り図に相当するものである。またこれまでの韓日における異文化間コミュニケーション研究における問題のありかを指摘し、韓国語と日本語を対象にして対照言語行動研究を目指す若手研究者に、言語行動を捉える新たな視点の提供を目的としたものである。

これまでの韓日両言語における異文化間コミュニケーション研究の内容を検討すると、次の2点にまとめることができる。(1)依頼、断り、謝罪などの言語行動の対照研究が主流であるが、新しい言語行動の分析が試みられている。(2)上下・親疎・男女による言語行動の違いを見出そうとする。こうした研究の問題としては、次の2点が指摘できよう。(a)研究の問題意識が不明瞭である。(b)方法論的な不適切性が指摘される。

こうした先行研究の課題を踏まえ、本研究プロジェクトでは、次のような調査研究を計画し遂行している。

(1)韓・中・日の3ヶ国の異文化間コミュニケーションのあり方に関する統合的な研究

(1-1)母語場面と接触場面における言語行動の実態を調査

(1-2)言語行動に関する使用意識と相互の評価意識を調査

(1-3)会話の開始から終了までの一連の言語行動を調査

(2)個人情報という抽象的な内容を研究の材料として導入

本研究プロジェクトが韓・中・日の3ヶ国の言語行動の対照研究のひとつのベースラインになることを期待する。

